

# 『今昔物語集』の要説明疑問表現

——「疑問詞——ニカ。」形式を中心に——

磯 部 佳 宏

## 一 はじめに

中古の要説明疑問表現には、

疑問詞（……）カ——。

疑問詞——ゾ。

の画形式がみられるが、『源氏物語』を調査したところ、前者の全346例中、約半数の167例の場合、係助詞「カ」が断定の助動詞「ナリ」の連用形「ニ」に下接した形となっており、特に、次のように「ニカ」以下が省略された形が109例と目立っている。

(1) 春宮のおほちおとどなど、いかなる事にかと思し疑ひてなんありける。  
(桐壺)

(2) (薰)「……。(あなたハ)いかなる御なやみにか」と(匂宮)聞こえ給ふ。  
(浮舟)

つまり、実際には、

疑問詞——ニカ。

の形で多用されているわけで、この形式は、実質的には「ニカ」で文が終止していることから、むしろひとつの独立した形式として取

り扱って、

(3) (中将)〈あさましう、こはいかなる事ぞ〉と思ひ惑はるれど、  
(帚木)

(4) (中の君)「いかなる御心地ぞ」と、(浮舟)「たちかへりとぶら  
ひ聞こえ給へば、  
(東屋)

のような、180例存在している「疑問詞——ゾ。」形式と、直接比較  
対照できる存在なのではないかと考えられた。

そして、この「疑問詞——ニカ。」の形式は、築島裕氏が、  
和文では、(中略)「か」「や」(引用者注「ニカ」「ニヤ」)の形の  
こと)で文又は節を終止して、あとの「あらむ」などを省略した

やうな形が多いが、これは訓点には殆ど見出されないやうである。  
と指摘されているように、中古においても、漢文訓読の世界では

稀のようであるし、また、中世の覚一本『平家物語』では、「ニカ」  
以下の省略されていない場合も含めて、用例が全くみられないとい

う調査結果から考えて、この「疑問詞——ニカ。」の形式は、中古  
和文において好んで多用される、特徴的表現なのではないかと思わ

れる。

『今昔物語集』の要説明疑問表現 —— 「疑問詞——ニカ。」形式を中心に ——

この稿では、この「疑問詞——ニカ。」の形式の、文体的要素との関わりを考える意味で、『今昔物語集』における用例について調べてみたいと思う。

『今昔物語集』については、同一概念を表しながら、和文脈と漢文訓読脈とで対立していると考えられる語群の、本集における分布を調査した多くの研究<sup>⑤</sup>によって、前半は漢文訓読的色彩が強く、後半は和文調であると一般に言われている。

これらの研究の中で、要説明疑問表現に関わるものとしては、たとえば、松城俊太郎氏に疑問副詞に注目した論考<sup>⑥</sup>がみられる。氏は、理由を問う疑問副詞として、「何ソ」「何ト」「何テ」の三語をとりあげ、「何ソ」と「何ト」については、巻二十の前後で分布に交代がみられることから、これを、本集における漢文訓読調と和文調の対立の一例であるとされる。これに対して、「何テ」は本集全体にほぼ平均して分布していることから、理由を問う副詞として「いかで」を主用するのは、本集の編者固有の文体によるものだと考えておられる。

本稿では、「疑問詞——ニカ。」形式の本集における分布状況について調査し、要説明疑問表現の他の形式、特に「疑問詞——ゾ。」との関係について考えてみたい。

## 二 要説明疑問表現の諸形式

表1は、本集に存在している要説明疑問表現の用例を、次の(a) (n)の14種類に分類し、それぞれの用例数を巻別に示したものである。(テキストは「日本古典文学大系 今昔物語集」。なお、本文引用の

際は、私意により表記を改めた箇所がある。また、心中思惟の部分には(〜)を付した。)

(a) 疑問詞(……)カ——。

係助詞「カ」が断定の助動詞「ナリ」の連用形「ニ」に下接して「ニカ」の形となっている場合は、別の形式として除外する。なお、疑問詞として「イカガ」「何カダ」「何ガ」等の表記が用いられている場合は、その語構成要素に係助詞「カ」が含まれていることから、この形式の中に含める。また、「何ヲカ行テ供養スル事ヲ得ムヤ。」(巻3の34)のように、文末に助詞「ヤ」を付加している場合も、この中に含めることとする。

(b) 疑問詞(……)カハ——。

(a)形式の係助詞「カ」に、さらに係助詞「ハ」が下接している

表 1

巻	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	計	
1	27								35	6	10	2			80	
2	23								56	2	7	4			88	
3	21				1				36	4	4	2			68	
4	33								41	1	9	7	1		92	
5	23			2	1		1		32	3	6	2			70	
6	17								23		5	4			50	
7	11				1				19		5	1			37	
9	22								29	1	19	1			72	
10	36			3	1				39	1	9	2			91	
11	12	1		1	2				28	1	6				51	
12	20	2		4			1		23		7	3			60	
13	10			2					27	1	8	3	1		52	
14	17	2		3	2				26	1	13	2			66	
15	9			2	2				27		2		2		52	
16	34	7	1	5	5				52	1	1	25	6	1	138	
17	15	2		2					24		5	5			53	
19	30	9	1	16	3		1		50		18	4	5		137	
20	15	4		8	1				50	2	12	4	4		100	
22	5	1		4					7		3		1		21	
23	8			8	2				15	2	2		1		38	
24	25	5		10	2			2	34	1	10	2			91	
25	15	3		1	1				8		3	1	1		33	
26	24	7		9	8		1		56		21	11	1		138	
27	22	4		7	6				36		10	14	2		101	
28	26	5		15	1			1	56		13	8	2		127	
29	26	6		23	1				44		1	14	10		125	
30	14	5		1	2			1	16	1	10	4			54	
31	19	6		8	3				32		16	5	2		91	
計	559	69	2	135	44		1	3	4	821	2	28	281	101	26	216

場合、「カハ」でひとつの形式と考える。なお、「イカガハ」の形を含める。

(c) 疑問詞(……)ヤ——。

(a) 形式の係助詞「カ」の代わりに、係助詞「ヤ」の使用されているもの。

(d) 疑問詞——ニカ——。

係助詞「カ」が断定の助動詞「ナリ」の連用形「ニ」に下接しており、かつ「ニカ」以下の省略されていないもの。

(e) 疑問詞——ニカ。

(d) 形式と同様に「ニカ」の形で、かつ「ニカ」以下の省略されているもの。

(f) 疑問詞——ニヤ——。

(d) 形式の係助詞「カ」の代わりに、係助詞「ヤ」の使用されているもの。

(g) 疑問詞——ニヤ。

(e) 形式の係助詞「カ」の代わりに、係助詞「ヤ」の使用されているもの。

(h) 疑問詞——ニテカ——。

(d) 形式の「ニカ」の形の中に、助詞「テ」の挿入されているもの。

(i) 疑問詞——ゾ。

「ゾ」の下に、さらに終助詞の付加した「ゾヤ」「ゾヨ」「ゾトヨ」の形が、それぞれ15例、2例、1例みられるが、この形式の中に含める。また、「已レハ誰ッ。」(巻30の6)のように用い

られている「誰ソ」の形は「タソ」と読むものかと思われるが、この形式の中に含めることとする。

(j) 疑問詞——カ。

(i) 形式の助詞「ゾ」の代わりに、助詞「カ」が文末用法として使用されているもの。

(k) 疑問詞(……)カ——ゾ。

文中に係助詞「カ」が用いられていながら、文末にさらに助詞「ゾ」の存在しているもの。なお、「ゾ」の下に、さらに終助詞の付加した「ゾヤ」の形が2例みられるが、この形式の中に含める。

(l) 疑問詞——。

疑問詞のみで、文中にも文末にも助詞の存在しないもの。なお、「何ッ此ヲ乍着ヲ罪ヲ造ル。」(巻1の4)のように、疑問詞として「何ゾ」が用いられている場合、これを一語として扱い、この形式の中に含める。また、この「何ゾ」が疑問詞として使用されている例の中には、「何ッ七年ヲ待ムヤ。」(巻1の21)のように、文末に助詞「ヤ」の付加している形がみられるが、この場合もこの中に含めることとする。

(m) ——、疑問詞。

「汝ガ妻ノ端正ル事、此ノ天女ト何ニ。」(巻1の18)、「其二侍ラム思フ何ニ。」(巻29の17)のように、疑問詞で文が終止しており、かつ、以下が省略されているとは考えられないもの。

(n) その他

存疑例、および、補説が必要で、補説方法により分類が異なっ

てしまうものなど。

表2は、この(a)～(n)の中で、比較的用例数の豊富な、(a)・(b)・(d)・(e)・(i)・(l)・(m)の7形式について、天竺部(巻1～巻5)、震旦部(巻6～巻10)、本朝仏法部(巻11～巻20)、本朝世俗部(巻22～31)、それぞれの部内における用例数の合計、および使用率を示したものである。

表2

	a	b	d	e	i	l	m	総計
天竺部	127 (31.9%)		2 (0.5%)	2 (0.5%)	200 (50.3%)	36 (9.0%)	13 (3.3%)	398 (100%)
震旦部	86 (34.4%)		4 (1.6%)	2 (0.8%)	110 (44.0%)	38 (15.2%)	8 (3.2%)	250 (100%)
本朝 仏法部	162 (22.8%)	27 (3.8%)	43 (6.1%)	14 (2.0%)	307 (43.3%)	105 (14.8%)	27 (3.8%)	709 (100%)
本朝 世俗部	184 (22.5%)	42 (5.1%)	86 (10.5%)	26 (3.2%)	304 (37.1%)	102 (12.5%)	53 (6.5%)	819 (100%)

### 三 「疑問詞——ニカ。」の形式

表1および表2より、

(d)疑問詞——ニカ。

(e)疑問詞——ニカ。

の両形式についてみると、いずれも天竺部・震旦部では、きわめて用例が少なく、本朝部に用例が集中しており、特に、本朝世俗部での使用率が高くなっていることがわかる。

しかし、「源氏物語」においては、

(d)形式と(e)形式の用例の合計数(167例)が、(i)形式「疑問詞——ゾ」の用例数(180例)にほぼ匹敵していたのに対し、本集の場合、本朝世俗部においても、約3分の1程度であり、はるかに少ない。

また、(d)形式と(e)形式の用例数を比較すると、「源氏物語」では、(d)形式58例に対し、(e)形式109例と、(e)形式が倍近く使用されており、この用例の多さからも、(e)形式をひとつの独立した形式として取り扱うのが適当であると考えられたのであった。これに対して、本集の場合、逆に、(e)形式は(d)形式の約3分の1の用例数を示しているにすぎない。

表3は、本集における、(d)形式・(e)形式の使用場面(地の文・心中思惟・会話文)について部別に示したものである。

表3

	d				e			
	地	心	会	計	地	心	会	計
天竺部	1	1		2		1	1	2
震旦部		3	1	4		2		2
本朝 仏法部	10	27	6	43	1	7	6	14
本朝 世俗部	18	55	13	86	5	13	8	26
計	29 (21.5%)	86 (63.7%)	20 (14.8%)	135 (100%)	6 (13.6%)	23 (52.3%)	15 (34.1%)	44 (100%)

(d)形式の場合、

(5) (聖人) 〈此レハ何事ニカ有ラム〉 思フ程ニ柴ノ戸ヲ押シ開テ入ル。  
(卷10の34)

(6) 〈何ナル事ニカ有ラム〉ト思テ恐テ駭ク、恐テ出ル者モ有リ。  
(卷19の14)

(7) 寛蓮、此ヲ聞テ、〈誰ガ云ハスルニカ有ラム〉ト恠ク思ヘドモ、  
(卷24の6)

(8) 供奉此レヲ見テ、〈此ハ何カニ為ル事ニカ有ラム〉ト思ヘドモ、  
(卷28の7)

のように、心中思惟において、言語主体の「疑い」の表現として使  
用されている例が目立ち、また、

(9) 此ノ仙人、何カ有ラム 思モ不敢ス、歩ヨリ行キ給ヒケル  
(卷5の4)

(10) 中比ニ成テ、何ナル僧ニカ有ケム、別当ニ成テ、此ノ寺ヲ政ツ程ニ、  
(卷11の29)

(11) 兼時、何カニ思ケルニカ有ケム、其ノ日左ノ一番ニテ撰テ此ノ宮城ニナム乗  
タリケル。  
(卷23の26)

(12) 今昔、何レノ程ノ事ニカ有ケム、侍程也ケル者ノ、誰トハ不知ス、年卅許ニ  
テ長スハヤカニテ、少シ赤鬚ナル有ケリ。  
(卷29の3)

のように、地の文で挿入句として使用されている場合も多い。

(e)形式の場合も、同様に、

(13) 玄渚、道明ハ然カ云ツレド、〈何ナル事ノ有ルニカ〉不審クテ、其ノ堂ニ行テ、  
(卷7の32)

(14) 夕暮方ヨリ不見ネバ、〈例ノ、何コニ這隠レタルニカト思フニ、夜ニ入マデ不見ヌヲ  
(卷7の32)

襖者モ有、

(15) (釣人共) 〈何ナル事ニカ〉ト見程ニ、出来合ハムト云シ方ヲ見上タレバ、  
(卷26の9)

のように、心中思惟において、言語主体の「疑い」の表現として使  
用されている例が多く、

(16) 止事无キ所ニテ有ケル、何ルニカ、此ク破壊シタル也。  
(卷20の34)

(17) 然マデ怖シカルベキ事ニモ非ヌニ、此ハ何ナルニカ、心モ肝モ失セテ、只死ヌ許  
怖シク思エケレバ、  
(卷25の7)

のように、地の文で挿入句として使用されている例もみられる。こ  
れらの場合、両形式の間に、特に用法的差異はないように思われる。

『源氏物語』の場合も、(d)形式は、

(18) 大夫も、〈いかなる事にかあらむ〉と、心得がたう思ふ。  
(若紫)

(19) 菊の、……、いかなる一本にかあらむ、いと見どころありてうつ  
ろひたるを、  
(宿木)

のように、心中思惟における、言語主体の「疑い」の表現や、地の  
文での挿入句としての用例が多く、(e)形式の場合も、前掲の用例(1)  
や、

(20) (源氏) 〈めでたしとおもほししみにける御かたち、いかやうな  
るをかしさにか〉と、ゆかしう思ひ聞こえ給へど、  
(総合)

のように、心中思惟において、言語主体の「疑い」の表現として使  
用されている例は多い。

しかし、『源氏物語』においては、(e)形式の用例の半数近くは、前掲の用例(2)や、

(21) (中将)「忍びたるさまに物し給ふらんは、誰にか」と(妹尼三)問ひ給ふ。(手習)

(22) (中の君)「……………。(あなたハ)いかに推し量り給ふにか」と(北の方二)のたまふ。(東屋)

のように、会話文において、「問い」の表現として使用されていた。そして、前掲の用例(4)や、

(23) (薫の隨身)「まうとは、何しにここにはたびたびは参るぞ」と(使二)問ふ。(浮舟)

のような、(i)形式「疑問詞——ゾ」による「問い」が、強い調子で明確に解答を要求する表現であるのに対し、(e)形式の場合は、婉曲的でやわらかい表現の「問い」として、独自の表現効果を示していたのではないかと考えられたのである。

本集の場合、(e)形式が会話文中で使用されている例は少なく、しかも、

(24) 「……………、古ハハ人行ケル何ニ云ヒ伝ケル」今ハ「……………」ト云ヒ出テ、人行ク事无シ」ナ一人ガ云ケル。(巻27の13)

のような、挿入句的な用例を除くと、次のように、對話相手に対する「問い」の表現として使用されているのは、わずかに13例である。

(25) 和尚、……………、三度灑キ給ケルニ、弟子ノ僧、是ヲ見テ怪ムデ、「是ハ、何事ニテ此クハ灑カセ給フニカ」ト問ヒ申ケレバ、(巻11の12)

(26) 男着タル衣ヲ一ツ脱テ与フレ、尼手ヲ迷シテ、「此ハ何ナル人ノ此クハ給フニカ」云ヘバ、男、「……………」ト云ヘバ、(巻19の5)

(27) 守、「……………」トイヘバ、(某)「金何許可罷入ニカ」ト問。

(28) 上達部・殿上人、此ヲ見テ、「彼レハ何ノ宮ノ女房ノ物見ルニカ」ト問ヒ被尋ケレドモ、(巻26の14)

このうち、9例までは、(25)・(26)のように、對話相手に対する敬語表現がみられることから、この(e)形式による「問い」は、本集においても、主として、身分の上位者に対する、婉曲的でやわらかい表現の「問い」であろうと思われる。

なお、(d)形式の、会話文における用例20例中、7例が「問い」の表現として使用されているが、1例を除いて、次のように、「ニカ」

以下が對話相手に対する敬語表現の形となっている。

(29) 博雅聞テ、音ヲ出シテ、「……………」ト云ケレバ、言ノ云ク、「此申スハ誰ニカ御座ス」ト。(巻24の23)

(30) 守、「……………」抑其然ル目見タルハハ、然ル事ニテ、我支度ナム違ヌル」トイヘバ、(某)「何事ニカ候ラム」ト云ニ、守、「……………」トイヘバ、(巻26の14)

(31) 女ノ云ク、「……………」然ハ有モ、大切ニ可申キ事ノ得ル也。暫シ立留マリ給ト、男、「何事ニカ候ラム」云テ立留バレ。(巻27の20)

(32) 郎等共喜合テ、「抑モ此ハ何ソノ平茸ニカ候フト問ヘバ、守ノ答フル様、……………」ト云ヘバ、(巻28の38)

これらの形式と比較すると、(25)・(26)のような(e)形式による「問い」の表現は、疑問の係助詞「カ」が実質的には文末に存在することに

より、間接的にはあるにせよ、對話相手に対して「問いかけ」を示唆する効果を持つていないのではないかと考えられ、両者の表現的

価値が全く等しいとは思われないが、しかし、たとえば、用例(27)は

用例(30)と連続する部分であり、同一の場面で、同一の言語主体が、同一の対話相手に対して両形式を使用していることから、両者の待遇の価値については差がないと言えよう。つまり、本集における(e)形式による「問い」の表現は、一般的に、待遇的には、対話相手に対する敬意を含んでいる性格のものではないかと考えられる。

#### 四 「疑問詞——ゾ」の形式

表1および表2より、

(i)疑問詞——ゾ。

の形式についてみると、この形式は、本集全体を通じて、あらゆる形式の中で最も数多く使用されており、特に、天竺部では要説明疑問表現全体の半数以上がこの形式で、震旦部や本朝仏法部においても4割を超えている。本朝世俗部では、他部に比べて使用率が低くなっているが、これは、前述のように、本部では、(d)「疑問詞——ニカ——」形式や(e)「疑問詞——ニカ。」形式の使用率が高くなっているためである。

ところで、『源氏物語』では、この(i)形式(180例)と、(a)「疑問詞(……)カ——」形式(179例)、それに(d)形式と(e)形式の合計(167例)の三者が、ほぼ同比率で使用されていたが、本集の場合、これと最も比率の近い本朝世俗部においても、(i)形式の使用率ははるかに高くなっている。

このことは、ひとつには、要説明疑問表現の史の変遷という事実を反映しているのではないかと考えられる。たとえば『伊勢物語』においては、

「今昔物語集」の要説明疑問表現 —— 「疑問詞——ニカ。」形式を中心に ——

(33) (修行者)「かゝる道はいかでかいまする」といふを見れば、

(9段)

のように(a)形式が用いられているのに対し、本集の同一説話では、(34)僧、業平ヲ見テ、奇異ニ思テ云ク、「此ル道ヲバ何ヲ御座」ト。

(卷24の35)

のように(i)形式となっている例がみられることから、要説明の「問い」の表現として、歴史的に(i)形式が主用されるようになってきているのではないかと思われる。

『源氏物語』の場合、前述の用例(4)や(3)、さらに、

(35) (源氏)「かの尋ね出でたりけむや、何さまの人ぞ。……」と(右

近二)問ひ給へば、 (玉鬘)

のように、この形式の会話文における用例は、身分の上位者から下位者に対して使用されている場合が多く、強い態度で明確に解答を要求しようとする「問い」の表現であると考えられた。

(36) 右近来て、(浮舟二)「殿の御文は、なとて返し奉らせ給ひつるぞ。」

(浮舟)

ゆゆしく忌み侍るなるものを、

(37) この人々は、「……。……、残り多かる御世の末を、いかにせさせ給はんとするぞ。……」と(浮舟二)言ひ知らすれど、

(手習)

のように、むしろ下位者から上位者に対して使用されている場合もみられないわけではないが、この場合は単なる「問い」ではなく、対話相手に対する強い非難を含んだ表現であると思われる。

これに対して、本集では、

(38) 其ノ時ニ帝釈、佛ニ問奉テ云ク、「何ノ故ニ此ノ病比丘ノ恩ヲ報ジ給フ」

(卷2の3)

(39) 翁ノ云ク、「……亦、君ハ何事ヲ役トシ給フ人」ト。孔子ノ云ク、「……」ト。

(卷10の10)

(40) 義齋、聖人ニ問テ云ク、「聖人ハ何レノ程ヨリ此ノ所ニハ住給フ」ト。……。

(卷13の1)

(41) 此ノ男、蛇持タル男ニ云ク、「何コヘ行ク人」ト。

(卷16の15)

蛇持ノ云ク、「京ハ昇ル也。亦、主ハ何コヘ御スル人」ト。……。

(卷23の20)

(42) 僧正ノ立給ヘル所ニ走リ来テ、(法師原)「盗人ハ何コニ候フ」ト問ヒ申ケレバ、

(卷29の34)

(43) 忠文驚キ驢ニ出會テ、「此ハ何事ニ依テ思ヒ不懸ズ渡リ給ヘル」ト問ケレ親王、「……」ト宣バ、  
のように、この形式の「問い」に、対話相手に対する敬語表現の含まれている場合も少なくなく、身分の下位者から上位者へ対しても、ごく一般的に使用されている。用例(4)のように、敬語表現の有無に関わらず、同一の表現が対応している場合がみられることから、本集では、少なくとも『源氏物語』の場合と比べて、待遇的要素にとらわれずに、この(i)形式が、要説明の「問い」の形式として、より一般化・固定化していると言えよう。

『源氏物語』においては、この(i)形式と対照される形で、婉曲的でやわらかい「問い」の表現として多用されていた(e)「疑問詞——ニカ」。形式が、前述のように、本集ではあまり使用されないのも、逆に考えると、この(i)形式が「問い」の表現として、より一般化してきたためだとも考えられよう。

(44) 其時ニ頭、車ノ許ニ寄テ、「此ハ誰ガ御シマシタルニカ。何事ヲ被仰ニ御座

ル」ト問バ、

(卷24の8)

のように、両形式が同一会話内で使用されている例がみられることから、本集においては、両形式の性格的差異が小さくなってきていると言えるのではないだろうか。

ところで、『源氏物語』の場合、この(i)形式全180例のうち、約3分の1の59例は、前掲の用例(3)や、

(45) (源氏)「なごて、かくはかなき宿りは取りつるぞ」と、くやしさもやらん方なし。

(46) (兵部の君)「この人をも、いかにし奉らむとするぞ」とあきれ

(玉鬘)

ておぼゆれど、  
のように、心中思惟において使用され、言語主体のいわばマイナスの感情、すなわち、後悔・驚き・困惑・悲嘆などを表す、強い感情表現として用いられていた。

表4は、本集における、(i)形式の使用場面について部別に示したものである。これを見ると、天竺部や震旦部では、ほとんど全てが会話文において使用されてお

ける「問い」の表現として用法が限定されていることがわかる。これに対して、本朝部では、

表4

	地	心	会	計
天竺部	2 (1.0%)	2 (1.0%)	196 (98.0%)	200 (100%)
震旦部		4 (3.6%)	106 (96.4%)	110 (100%)
本仏法部		22 (7.2%)	285 (92.8%)	307 (100%)
本朝世俗部		39 (12.8%)	265 (87.2%)	304 (100%)
計	2 (0.2%)	67 (7.3%)	852 (92.5%)	921 (100%)

(47) 其ノ時ニ僧都、奇異ノ思ヲ成シテ、(此ハ何ナル事)ト思フ程ニ、

(48) 其レガ、昼、宿ツル時、(何ナル人ノ居タル)思テ臨ニ、(卷14の40)

(49) (五位) (何ソノ湯浦ス)ト見レバ、此水ト見ハ、味煎也ケリ。

(50) (何ナル事)ト恠シク思テ、二人ノ女寄テ見ルニ、女モ男モ無し。(卷16の7)

(51) 此レヲ見テ、(殿上人共) (穀断ハ争テ此クハ可為キ)ト恠ビ疑ヒテ、(卷26の17)

(52) 夢ノ様ニ思テ、(平中) (此ハカニシツル事)ト思フニ、喜キニモ身飾ヲ物也ケリ。(卷27の8)

(53) (弁) (此ヲバ何ド今マデ不見ザリケル)ト返ミス我ガ心モ口惜クテ、(卷28の24)

(54) 夢ノ様ニ思テ、(平中) (此ハカニシツル事)ト思フニ、喜キニモ身飾ヲ物也ケリ。(卷30の1)

(55) (弁) (此ヲバ何ド今マデ不見ザリケル)ト返ミス我ガ心モ口惜クテ、(卷31の7)

(56) (弁) (此ヲバ何ド今マデ不見ザリケル)ト返ミス我ガ心モ口惜クテ、(卷31の7)

(57) (弁) (此ヲバ何ド今マデ不見ザリケル)ト返ミス我ガ心モ口惜クテ、(卷31の7)

(58) (弁) (此ヲバ何ド今マデ不見ザリケル)ト返ミス我ガ心モ口惜クテ、(卷31の7)

(59) (弁) (此ヲバ何ド今マデ不見ザリケル)ト返ミス我ガ心モ口惜クテ、(卷31の7)

(60) (弁) (此ヲバ何ド今マデ不見ザリケル)ト返ミス我ガ心モ口惜クテ、(卷31の7)

(61) (弁) (此ヲバ何ド今マデ不見ザリケル)ト返ミス我ガ心モ口惜クテ、(卷31の7)

(62) (弁) (此ヲバ何ド今マデ不見ザリケル)ト返ミス我ガ心モ口惜クテ、(卷31の7)

(63) (弁) (此ヲバ何ド今マデ不見ザリケル)ト返ミス我ガ心モ口惜クテ、(卷31の7)

(64) (弁) (此ヲバ何ド今マデ不見ザリケル)ト返ミス我ガ心モ口惜クテ、(卷31の7)

(65) (弁) (此ヲバ何ド今マデ不見ザリケル)ト返ミス我ガ心モ口惜クテ、(卷31の7)

(66) (弁) (此ヲバ何ド今マデ不見ザリケル)ト返ミス我ガ心モ口惜クテ、(卷31の7)

(67) (弁) (此ヲバ何ド今マデ不見ザリケル)ト返ミス我ガ心モ口惜クテ、(卷31の7)

(68) (弁) (此ヲバ何ド今マデ不見ザリケル)ト返ミス我ガ心モ口惜クテ、(卷31の7)

(69) (弁) (此ヲバ何ド今マデ不見ザリケル)ト返ミス我ガ心モ口惜クテ、(卷31の7)

『今昔物語集』の要説明疑問表現 —— 「疑問詞——ニカ。」形式を中心にして ——

はるかに弱い。このことは、逆に、本集では、この(i)形式が、要説明疑問表現における「問い」の形式として、より一般化し、固定化してきていることを示しているとも考えられよう。

## 五 おわりに

以上、『今昔物語集』の要説明疑問表現について、(d)「疑問詞——ニカ——」形式、(e)「疑問詞——ニカ。」形式、および(i)「疑問詞——ゾ。」形式を中心に考察してきた。

(d)形式、(e)形式の場合、天竺部や震旦部では用例が非常に少なく、本朝世俗部での使用率が最も高くなっている。これらの形式は『源氏物語』に代表される中古和文において多用されていることから、この事実は、本集では後半部が和文的色彩が強いと言われていることと関係が深いと思われる。もともと、これらの形式は、心中思惟や、地の文における挿入句としての用例が多いが、天竺部や震旦部においては、心中思惟や挿入句の部分自体がそれほど多くないと思われる、作品としての叙述態度とも無関係ではないかもしれない。また、本朝部においても、「ニカ」の形で実質的に文が終止している(e)形式が、会話文で「問い」の表現として使用されている例は、『源氏物語』の場合と比較すると、はるかに少なくなっている。

これに対して、(i)形式の場合、本集全巻を通じて高い使用率を示しており、本集では、一貫して、要説明の「問い」の表現として、この形式を主用していると言える。特に、天竺部や震旦部においては、ほとんど会話文における用例に限られ、本朝部においても、『源氏物語』の場合と比較すると、この形式が、心中思惟において、

強い感情表現として使用されている例ははるかに少なく、本集においては、要説明疑問表現における「問い」の形式として固定化してきていると考えられる。

なお、そのほか、要説明疑問表現の諸形式のうち、本集において分布に片寄りが目立つものとしては、(b)「疑問詞(……)カハ——」形式があげられる。この形式は、大部分が反語の形だが、本朝部では、

64女(破无)ト思テ、衣ヲ身ニ纏テ、佯シ臥シタレ、何ノ憚カハ、有ラム、男、懷ニ擯入テ臥シヌ。(卷16の8)

65大臣、「然ル心无ハ生テモ、何ニカハ、此次ニ死ヌ、吉キ事也」ト宣テ。(卷19の9)

66然レバ、(盗人ハ)逃テ走り去ヌ。誰ト云事モ、何テカハ、知ムト為ル。(卷26の18)

のように、全69例使用されているが、天竺部や震旦部では、全く用例がみられない。

(a)形式のうち、大部分が反語の例であるが、

67又五百ノ釈女、皆、王ヲ罵テ云ク、「誰カ奴婢ノ生ゼル王ト交通トセムヤ」(卷2の28)

68道俊ガ云ク、「我、偏ニ念佛ヲ修シテ、全ク余ノ暇无シ、何カ大般若経ヲ書写トセムヤ」(卷7の5)

のように、文末に助詞「ヤ」が付加されている形は、変体漢文的文型であると言われるが、本集では、天竺部に6例、震旦部に6例、本朝仏法部に1例、本朝世俗部に3例みられ、前半部に用例が集中している。また、(i)形式のうち、疑問詞として「何ゾ」が使用され

ている場合にも、

69一ノ白キ犬有テ、此ノ事ヲ不許テヌシ云ク、「……我レ、此ノ事ヲ思ヒ出シ、何ゾ、許ス事有ラムヤ」(卷9の22)

のように、文末に助詞「ヤ」が付加されている例が存在するが、天竺部に1例、震旦部に12例、本朝仏法部に3例、本朝世俗部に1例みられ、震旦部での使用が目立っている。

また、

60(六師外道)長者ニ問テ云ク、「何ノ故有テカ、例ニモ不似ヌ、冥シ給フゾ」(卷1の15)

61其ノ国ノ佛、羅睺羅ヲ見給テ、宣ハク、「……何テカ、汝、其ノ時ニ不奉遇テ、此ノ世界ニ至レルゾ」(卷3の30)

のように、文中に係助詞「カ」が用いられていながら、文末にさらに助詞「ゾ」の存在している(k)形式は、天竺部での使用が目立っている。

注

(1)拙稿「中古和文の要説明疑問表現——『源氏物語』を資料として——」(『日本文学研究』第26号(一九九〇年))

(2)『源氏物語』の本文は、『日本古典文学全集』による。

(3)築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(一九六三年東大出版会 七五四—七五四ページ)

(4)拙稿『平家物語』の要説明疑問表現(『辻村敏樹古稀記念論文集』)

(一九九二年三月刊行予定 明治書院) 所収)

(5)たとえば、大系本の解説では次の論考が取りあげられている。

堀田要治「如シ」と「様ナリ」とから見た今昔物語集の文章」

〔国語と国文学〕第18巻第10号

石垣謙二「語法より観たる今昔物語集——「が」「の」の用法二三について——」(同)

堀田要治「今昔物語集に於ける使役の助動詞ス・サス・シムについて」(橋本博士還暦記念国語学論集)

なお、本集の国語学的研究史については、佐藤武義『今昔物語集の語彙と語法』(一九八四年 明治書院)に詳しい。

(6) 船城俊太郎「今昔物語集の疑問副詞「何ソ」「何ト」「何テ」(国語学)77輯(一九六九年)

(7) 『伊勢物語』の本文は、「日本古典文学大系」による。

(8) 注(6)に同じ。